紀　　要

第 9 号

1996. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目　　次

序
‘廃棄’を考える－貝塚出土資料の検討にあたっての試論－〔鈴木康二〕 …… 1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動－セタシジミの成長速度と年齢構成－〔稲葉正子〕…… 11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕 …… 16
箆状木製品の用途について〔松澤　修〕 …… 25
縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－〔中村健二〕 …… 38
近江における弥生社会の理解にむけて－その方法と課題－〔大崎康文〕 …… 42
長浜市域における弥生時代の石器－今川東遺跡出土石器を中心に－〔稲葉隆宣〕 …… 51
石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－〔上垣幸徳・松室孝樹〕 …… 57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕 …… 79
近江へのアプローチ・その3－野洲・栗太をフィールドに－〔近江歴史クラブ〕 …… 85
1．野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕 …… 89
2．栗太・野洲における後期古墳の類型的把握
－古墳時代システム論への墓制的アプローチ－〔細川修平〕 …… 94
3．集落遺跡から見た古墳時代の特質－古墳時代システム論への予察－〔細川修平〕 …… 102
4．栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕 …… 110
5．近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕 …… 122
6．古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕 …… 130
7．田原道をめぐる二つの地域〔重岡　卓〕 …… 136
8．近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕 …… 149
9．栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕 …… 157
10．鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論
－滋賀県の事例を中心に－〔大道和人〕 …… 164
栗太・野洲郡のまとめ …… 179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川　靖〕 …… 185
古代遺跡と出土文字資料〔濱　　修〕 …… 200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕 …… 208
巡礼者の宿－鴨田遺跡出土の巡礼札より－〔重田　勉〕 …… 215
焼物二話〔稲垣正宏〕 …… 220
蒲生稲寸氏について－近江古代豪族ノート5－〔大橋信弥〕 …… 224
律令神話に於ける農業神について〔造酒　豊〕 …… 233

日本古代の対外関係史の一様相
　－日本古代史研究ノートあるいは覚書その２－〔芝池信幸〕 …… 238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 …… 243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕 …… 252

大津北郊白鳳寺院の造営計画（その１）

仲　川　　靖

１．はじめに

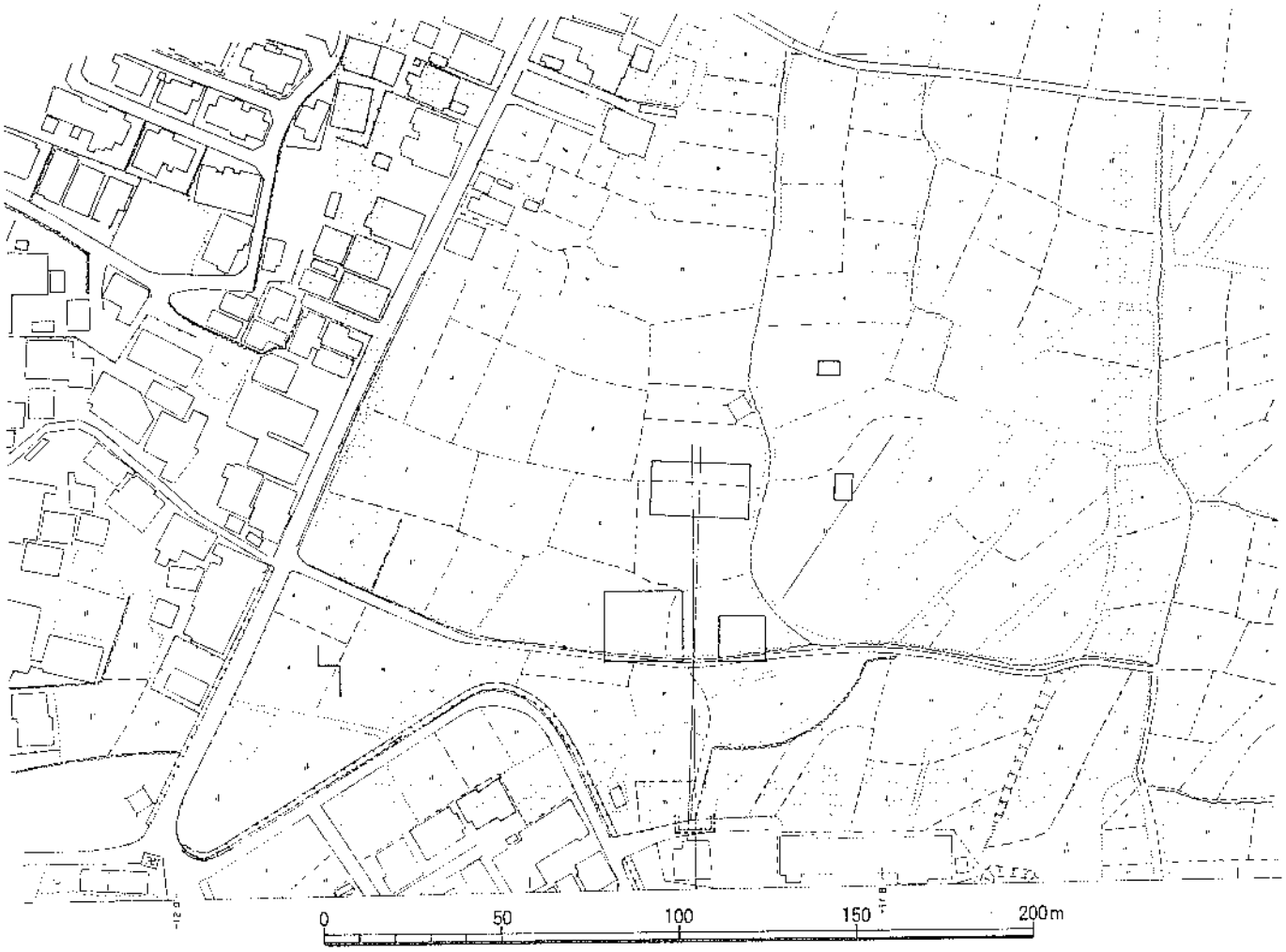
昭和59年の穴太廃寺の発掘調査から10年後の平成６年、寺院遺構を避けるように橋脚が造られ西大津バイパスが開通した。この間、穴太廃寺について何人もの研究者が論じてきており、報告書の刊行を待たずして誤った数値や年代観、伽藍配置図がひとり歩きしている。そこで、再度正確な資料を提示して再検討をしていただきたい所存である。本稿では寺院の造営計画ということで、奈良国立文化財研究所学報第47冊「研究論集Ⅷ」『飛鳥時代寺院の造営計画』で岡田英男氏が穴太廃寺について若干述べられておられるので、これに対する訂正および問題提起というかたちで論じてみたい。さらに、大津宮に関連する崇福寺、南滋賀廃寺の寺院造営計画についても比較検討してみたい。あとひとつ園城寺前身寺院（三井寺）があるが、発掘調査が成されていないため伽藍配置等不明な点があり本稿では取り扱わなかった。崇福寺と南滋賀廃寺については昭和49年発行の『滋賀県史蹟調査報告』「大津京趾（上）」、「大津京趾（下）」より考察を試みたが、縮尺図を200分の1に統一し、遺構の実測数値が曲尺の30.3㎝で表記されていたため、これをメートル数値に換算しなおして造営計画に用いられたであろう基準尺を割りだした。

２．穴太廃寺再建寺院の造営計画

（１）伽藍配置

再建寺院は法隆寺と逆の南向きの金堂を西、塔を東に並べた配置である。回廊は造られなかったとみられ、その痕跡はどこにも認められなかった。建物はこのほかに金堂、塔の北に講堂が配され、講堂の東に経蔵とみられる桁行３間、梁行２間の建物が位置し、その北方に桁行３間、梁行２間の総柱の建物が検出されている。中門については調査範囲外であり、また大津市教育委員会の周辺調査でも未検出であるため不明である。南門については昭和48年に保育園建設にともなう大津市教育委員会の発掘調査で礎石の抜取り穴とみられる遺構が２基検出されている。金堂と塔の心芯間の２等分線を中軸線として南に延長すると、２基の抜取り穴の真中を通り、また調査者が建物は北に広がるのではないかと報告していることから八脚門の南門の南側柱筋中央部とみられる。正面におそらく道路があったとみられ、これを西に延長すると以前位置していた穴太地蔵の前の弥生町に通じる東西の道路にあたる。穴太地蔵の前は調査の結果部分的ではあるが古墳時代の包含層上に非常に踏み固めた固い層があり、また南に東西方向の溝になるのではないかと思われる落ちこみが検出された。以上の見地から南門に通じる東西道があったことが推定される。

寺域については東西および北の明確な寺院遺構が確認されていないため不明であるが、林博通氏は東西約235ｍ、南北約216ｍを想定している。これは、西はバイパスの調査区域内で検出され



第1図　穴太廃寺再建寺院伽藍配置図

た鍵型に曲がる南北溝と東で検出された穴太廃寺の瓦を焼いたとみられる穴太瓦窯のすぐ西に隣接する南北畦畔の農道を東西の寺域とし、北は、平成３年度にバイパスを南北に縦断する農業用水路建設のために清水尚主任技師が発掘調査し検出した石組の溝により推定して求めた数値である。

（２）金　堂

金堂は、前述したように南面した建物である。金堂と塔の基壇南辺は一直線上にある。

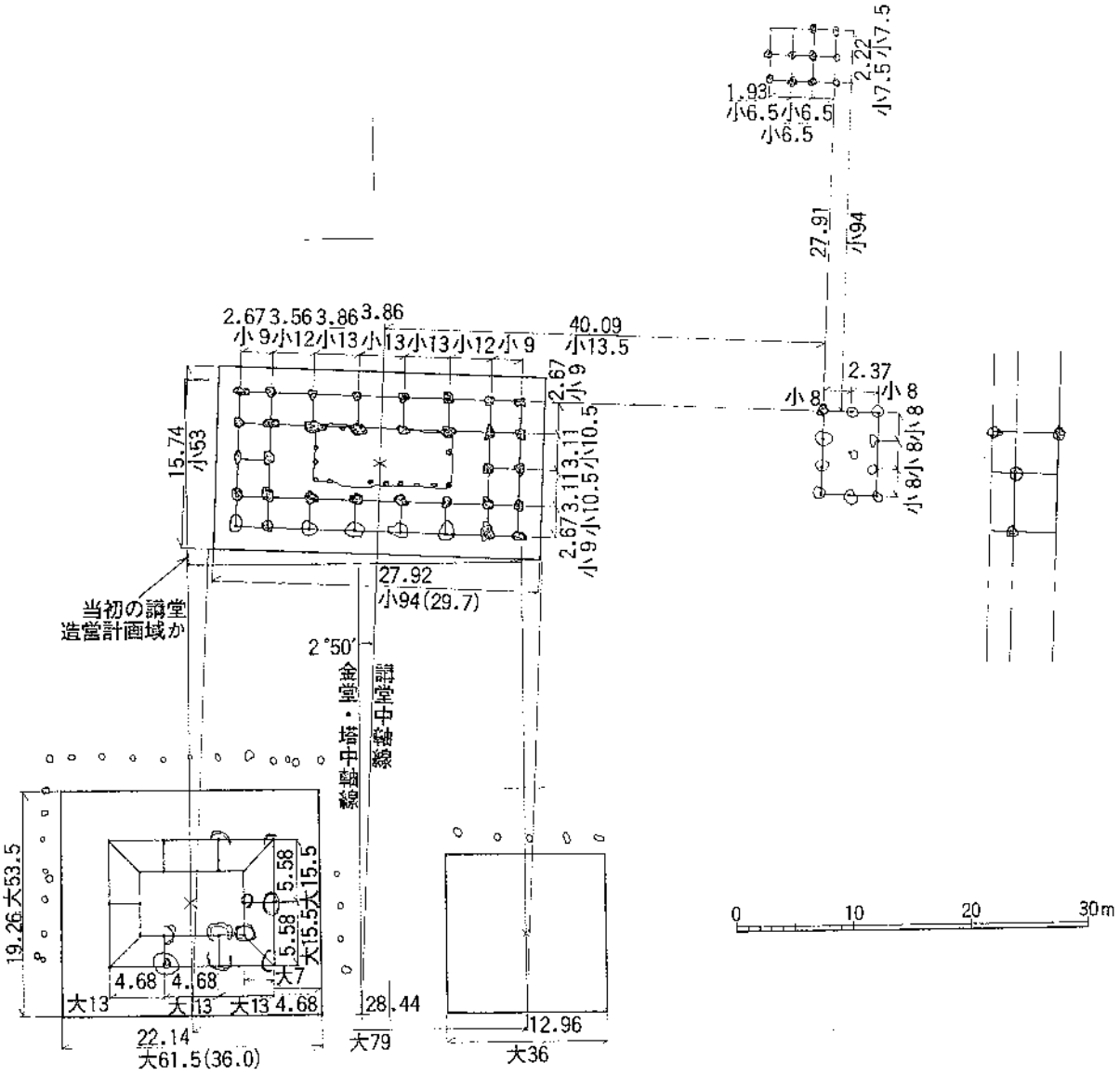
基壇は地覆石の上に瓦積みとした瓦積み基壇である。桁行22.14ｍ、梁行19.26ｍ、大尺では桁行61.5尺（１尺36.0㎝）、梁行53.5尺（１尺36.0㎝）で、その差は８尺で法隆寺金堂の９尺と比較しても極めて正方形に近い基壇であることがわかる。

礎石は、後世の開墾等で基壇上面がかなり削平され、当初の位置に残っているものはなかったが、わずかに根石が残っている部分と礎石の基部が残っている部分、根石を並べるために掘り込んだ掘り形から法隆寺金堂のような身舎・庇柱が整然とした柱配置とは異なり、庇の柱側通りでは桁行は中間二個所、梁行は中央一個所のみ据えられ、桁行３間、梁行２間となり各柱間が広い。同様の礎石配置が成されているものとして奈良県桜井市の山田寺金堂、三重県名張市の夏見廃寺金堂があり、工芸品ではあるが法隆寺宝物の玉虫厨子が同様の柱配置である。また、飛鳥寺中金堂も同様の柱配置であろうと考えられている。この礎石の位置から、柱間寸法は身舎桁行約9.36ｍ、梁行約5.40ｍになる。側通りの庇は桁行約14.04ｍ、梁行約10.80ｍで大尺では身舎桁行中央間13尺、両脇の間6.5尺、総間26尺、梁行各９尺、総間18尺、庇は桁行各間13尺、総間39尺、梁行各15.5尺、総間31尺、大尺１尺は山田寺と同じ36.0㎝である。基壇の出は約4.05ｍで11.25尺になり、かなり軒の出が大きくなる。岡田氏もこの点を指摘しているが、前述の寸法は根石の掘り形を考慮して礎石の基部を外れないようにした場合の最大数値である。これゆえに現地説明会では田中琢氏が裳階がついていたのではないかと指摘されたが上面が削平されているため不明である。法隆寺金堂の場合下成基壇の出が1.5尺で、これに基壇の出9.5尺を加え、柱通りから基壇の出までが11.25尺になる。飛鳥寺金堂では石敷き幅3.5尺の中央を軒の出とすると基壇の出9.75尺を加え、柱通りから11.5尺になる。山田寺金堂では石敷き幅は4.5尺あり、その中央を軒の出とすると、基壇の出９尺を加え、軒の出11.25尺になる。法隆寺金堂の現状の初重軒の出は12.2尺、4.392ｍで、穴太廃寺金堂の11.25尺、4.05ｍとすると34㎝ほどの差がまだある。調査中基壇下で軒丸瓦が等間隔で出土しており、基壇よりやや出るぐらいの軒の出と考えられる。

金堂・塔心芯間は28.44ｍで79尺になる。

階段等の施設は北側で痕跡かと思われるものが認められたが、東西辺については確認できなかった。瓦積み基壇は何回か修復をしており、北側の東コーナー部に近い所では瓦の代わりに自然石を積んだ部分や、西辺では瓦積みの裏込め粘土から８世紀の須恵器が出土しており、この修理の一時期を知ることができる。また各辺で作業用の足場を組んだ柱穴がほぼ柱筋に通るように並んでいるのが確認できた。

金堂は火災により廃絶したものとみられ周辺から炭、焼け土、火をうけた壁土が出土している。



第２図　穴太廃寺再建寺院伽藍配置図

また、火災による倒壊、もしくはその後に人為的に屋根を引き倒したとみられる瓦の散在が東西辺、北辺で認められた。

（３）塔

基壇は金堂と同じく瓦積み基壇であったとみられる。地覆石が残っていたのは東辺コーナー部のみで、上面はかなり削平を受けている。北辺と西辺では地覆石が抜き取られ瓦積みの平瓦が散在していた。地覆石は金堂のものより大きめのものを用いている。基壇の一辺は約13.0ｍで、これは大尺で36尺（１尺36.0㎝）になる。基壇内面にさらに版築して固めた層があり上成基壇があったと推測される。

中央部分には別の土で版築した円形の掘り込みが認められ塔の心礎が地中に存在することも考えられる。塔も金堂と同じ頃に類焼しており、周辺から炭、焼け土、瓦、風鐸、露盤の一部が出土している。

（4）講　堂

金堂・塔の南辺の心芯中点から北へ約47.00m大尺で130.5尺に講堂の心芯が位置する。ただし、中軸線は真北より東へ2度44分17秒、金堂・塔の中軸線からは2度50分東へ振っている。

主要伽藍の中で最も遺存状態が良好な遺構で、南側の基壇化粧石と庇の礎石のうち南辺部分が消失していた以外は廃絶当初のままの状態で検出された。

基壇は約30cmの低いもので周囲を自然石でおさえている。桁行7間、梁行4間で中央間に桁行側に3間、梁行側に1間半の須弥壇が設けられている。

基壇寸法は桁行27.92m、小尺で94尺(1尺29.7cm)、梁行15.74m、小尺で53尺 柱間寸法は身舎桁行約18.71m、梁行約6.24m側通りの庇は桁行約24.05m、梁行約18.58mで小尺では身舎桁行中央間3間が各13尺、両脇の間が12尺、総間63尺、梁行各10.5尺、総間21尺、庇は9尺 の出で身舎の各柱に対応する形で取り付き桁行総間81尺、梁行総間39尺になる。基壇の出は7尺 である。礎石は柱座はなく形状もいろいろであるが上面を平坦に加工してあるものも認められた。

また、庇の礎石間には壁の地覆石が幅約30cmで2列に並べられていた。入り口は地覆石がなかった正面3間と背面中央1間のみであとは壁で閉鎖されている。

須弥壇は約10cm掘くぼめてあり、周囲にほぼ等間隔で人頭大の束石を配し、束石間に割れた平瓦を幅約20cmで敷き並べてあり、須弥壇の腰周りは壁仕上げであったことが窺われる。中央間には円形に集石があり須弥壇上に祀られた仏像の台座を支えるための補強とみられる。須弥壇内埋土からは、多量の土師器小皿のほか、灰釉陶器の椀・火舎、二彩、三彩陶器、塑像螺髪、金ぱくを貼った磚仏、泥塔、皇朝十二銭の一つである神功開寶が出土している。須弥壇後方からは銀製の押出仏が、基壇東南隅の地業埋土から和同開珎が5枚出土している。

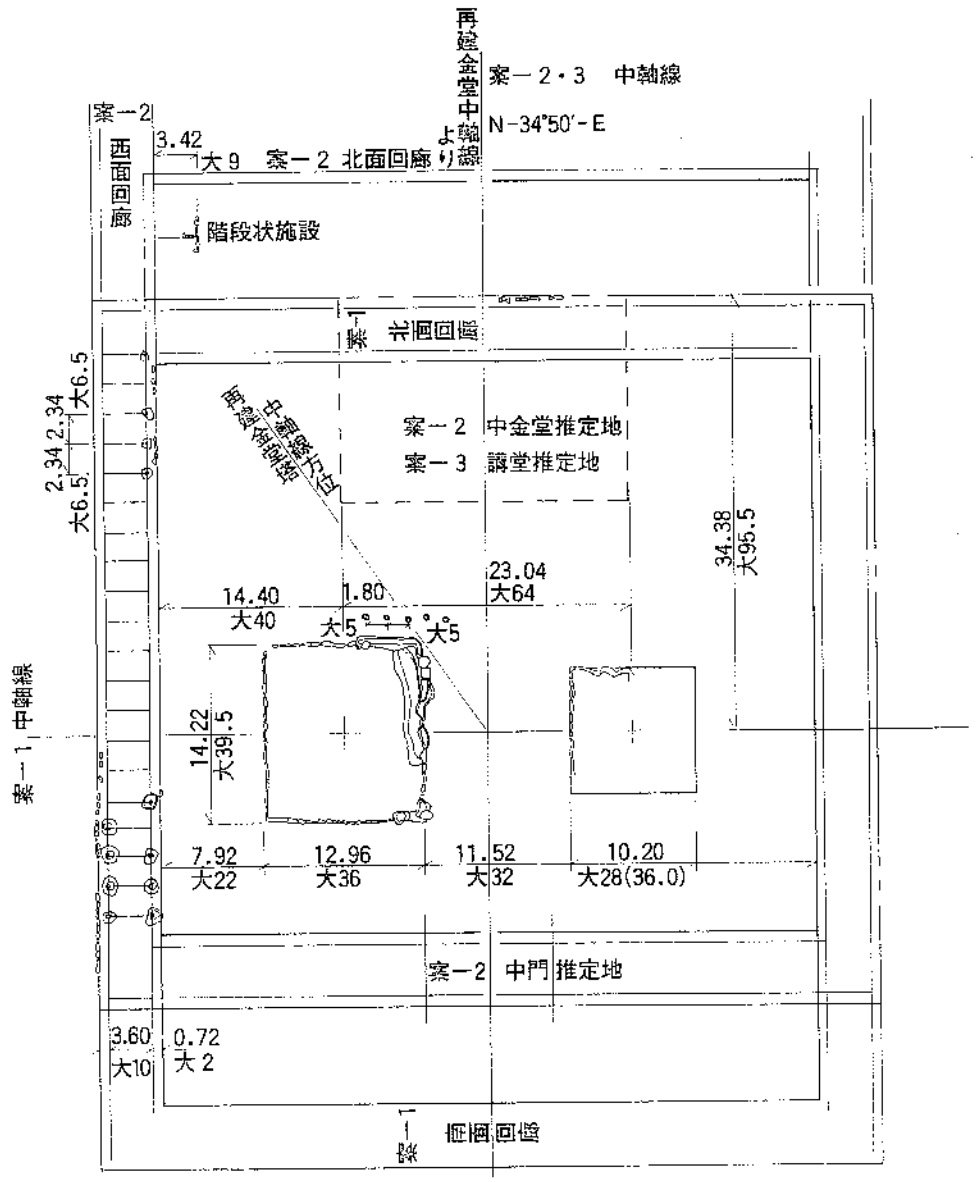
講堂は、出土遺物から11世紀後半頃に廃絶したものとみられる。火災等の痕跡はなく構造物を解体したあと基壇上面に山砂をかけて丁寧に埋め戻してあった。

（5）付属建物

講堂の東、心芯から小尺で135尺 約40mの位置に桁行3間、約7.12m、梁行2間、約4.75mの礎石建ち建物がある。礎石は北西隅に1石残るだけで、あとは根石のみである。柱間数値は桁行各8尺、梁行各8尺で小尺の1尺29.7cmで造営されている。中央に床束柱の礎石が1基あり高床になる建物とみられ経蔵か鐘楼になるものとみられる。

この建物より北へ小尺で94尺、約28mの位置に桁行3間、約5.8m、梁行2間、約4.45mの総柱の礎石建ち建物がある。礎石は東辺を除いてほぼ完存している。柱間数値は桁行各6.5尺、梁行各7.5尺で小尺により造営されている。礎石は火災を受けた痕跡がみられ、周辺から出土した土師器小皿より11世紀後半頃に廃絶したものとみられる。礎石は前述のものより小さいもので蔵のようなものになるのではないかと考えられる。

ほかに経蔵か鐘楼の建物の東で礎石および抜取り穴の列が認められ、僧房になるのではないであろうかとみられたが調査区外のため詳細は不明である。



第３図　穴太廃寺創建寺院伽藍配置図

３．穴太廃寺創建寺院の造営計画

（１）伽藍配置

再建寺院の講堂南東隅に基壇が重複して検出されたほか、回廊の一部、塔の基壇地覆石の一部が残っていた。伽藍中軸線は再建寺院から大きく東もしくは西に振れ、自然地形に沿って造営されている。遺構は塔、小金堂、回廊のほか、石列、階段状石列が検出されている。特に小金堂は地覆石のほとんどが遺存しており再建寺院の造営の際にも片ずけられることなく露呈していたものとみられる。伽藍配置は塔、小金堂（金堂）が直線上に並ぶものとみなすと、これらを回廊が囲んで講堂が外に配される奈良県桜井市の山田寺式伽藍配置（案－１）、塔と小金堂が横に並立するとみなした場合崇福寺と同じ川原寺式伽藍配置（案－２）か小金堂と塔が相対するので北九州の筑紫観世音寺式伽藍配置（案－３）になる。

ポイントになるのは塔と小金堂の北にある石列と階段状施設で、この石列を回廊の葛石とみな

した場合山田寺式に金堂の二重基壇の内下層基壇の地覆石とみなした場合川原寺式に講堂の基壇化粧石とみなした場合観世音寺式になる。さらに階段状の石列がどのような施設に取り付くものかにより変わってくる。先に中軸線が東もしくは西と述べたのは以上のようなことからである。

東に中軸線を仮定すると再建寺院の金堂・塔中軸線から東へ34度50分振る。

寺域の範囲については現段階では不明である。

（2）小金堂

地覆石が良好に残っており、桁行約14.22m、梁行約12.96mで大尺の39.5尺、36尺（1尺36.0cm）になる。

基壇北方で足場を組んだ柱穴が検出された他、南辺付近で寺院造営前に作られたとおもわれる土師器甕を2個体合わせ口にした土器棺墓が1基検出された。

（3）塔

基壇地覆石の内西辺の一部が遺存していた。地覆石は凝灰岩の切り石を用いており、他の建物と異なっている。一辺は約10.2mと考えられ、大尺の28尺とみられる。

小金堂と塔の心芯間は約24.84m、大尺の69尺、小金堂と塔の中央間は約11.52m、大尺の32尺になる。

（4）回　廊

再建寺院の講堂の下を通って両側で葛石列、礎石、抜取り穴が検出された南側は再建寺院の金堂の地業により削平されており直角に曲がる部分は不明である。

回廊は単廊で柱間数値は約2.34mで大尺の6.5尺（1尺36.0cm）になる。回廊梁行は約3.96m大尺の11尺に、葛石までの出は約72cmで大尺の2尺になる。

（5）北方葛石列と階段状施設

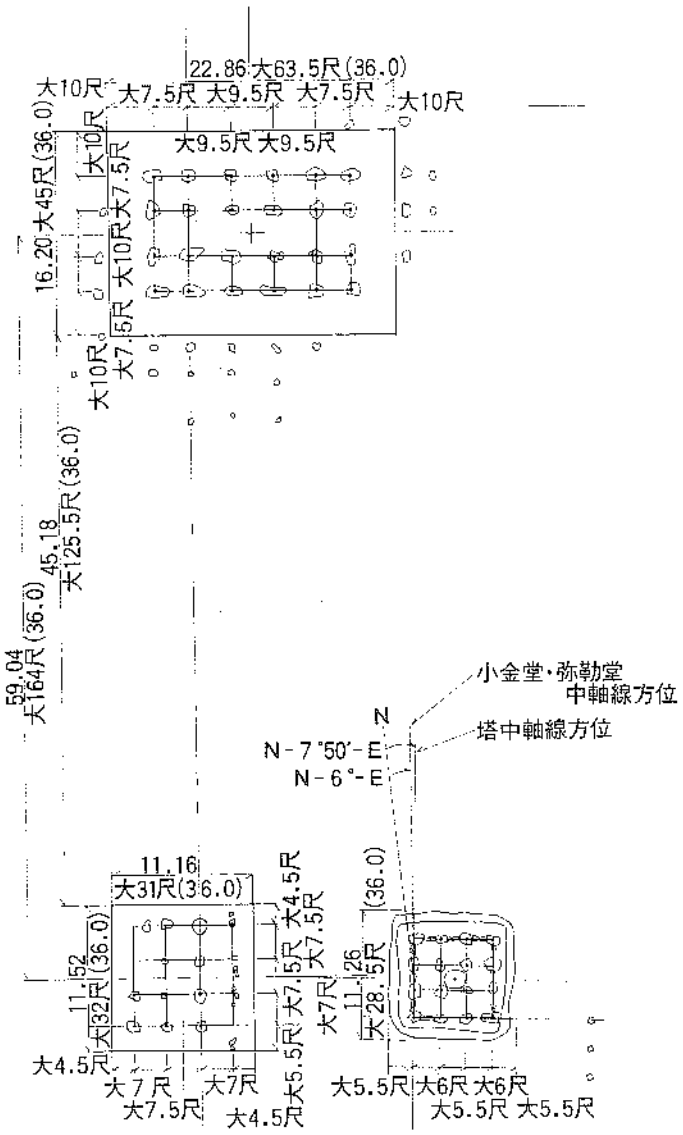
小金堂と塔の心芯から約34.38m、大尺の95.5尺北の位置に北側に面を揃えて約5.5m石列が検出された。再建講堂の基壇化粧石と同じものとみなして講堂の北辺になるとする見解が有力である。

階段状施設は、検出した回廊の延長上に接する形で検出されたが橋脚部分の狭い範囲での発掘調査であったため回廊に取り付くものかどうか不明である。階段は一段のみ検出されたが回廊が直角に曲がる部分のコーナー部分に取り付くものか、あるいは別の建物に取り付くものか現段階では不明である。

4．崇福寺の造営計画

（1）伽藍配置

昭和3年から4年に肥後和男氏が、昭和13年から14年にわたって柴田實氏が調査した結果、滋賀里山中の3つの尾根にわたって建物が検出されている。このうち北尾根の弥勒堂と中尾根の小金堂と塔が『扶桑略記』所載の崇福寺縁起にある天智天皇7年に天皇の発願により大津宮の乾（西北）にあたる山中に創建せられた寺院とされている。



第４図　崇福寺伽藍配置図

伽藍は山中の偏狭な尾根上を開いて造営されたため、極めて変則的な配置になっている。南尾根の建物群は方位が異なること、建物配置および柱配置からみて平安時代頃のものとされている。中尾根には西に小金堂が、東に塔が配置されている。谷を隔てて北尾根に肥後氏が小字名から推測した弥勒堂がある。この建物は小金堂・塔の中軸線上にあらず、小金堂側身舎の東柱列と弥勒堂身舎西側柱列が直線上にあり、弥勒堂がやや小金堂側、すなわち西側によっている。

弥勒堂は瓦積み基壇であることから金堂に比定されており、川原寺式伽藍配置とされている。

小金堂と塔の軸線は磁北より６度00分東へ振る。これは真北から０度40分西に振っていることになる。塔の軸線は磁北より７度50分東へ振っており、真北からは１度10分東に振っていることになる。

（2）小金堂

基壇寸法は桁行約11.52m、梁行約11.16mで塔と向いあう東面する建物である。大尺に換算すると桁行32尺、梁行31尺（1尺36.0cm）になる。礎石は3分の2程度遺存しており、桁行3間、梁行3間の建物と考えられる。しかるに、肥後氏は、東側柱列を流れ庇とみなしており、後世に改築されているものと考えている。事実柱間数値は桁行側が南から大尺の7尺、7.5尺、7.5尺となり南側柱間がやや短い、梁行側は西から大尺の7尺、7.5尺、7尺で中央間がやや広い問題のある数値である。

この結果、基壇の出は北、東、西辺が大尺の4.5尺で南辺のみ5.5尺となり、建物が全体に北へ寄ったものになっている。

（3）塔

礎石はもとより心礎まで完存している。心礎は地中にあり側面に穿たれた舎利埋納孔から金、銀、金銅製の容器が入れ子になった中に瑠璃壺にはいった水晶粒の舎利のほか紫水晶、南京玉、無文銀銭、金銅唐草文貼付鉄製圓鏡、青銅鈴、刺玉、香木片といった荘厳具が発見されている。

基壇寸法は、一辺11.26m、大尺の28.5尺になる。柱間数値は四天柱が大尺の5.5尺、庇側柱が中央間が大尺の5.5尺、両脇の間が大尺の6尺になり、基壇の出は大尺の5.5尺になる。

小金堂と塔は軸線が異なるため正確な数値ではないが、小金堂と塔の心芯間は約21.60m、大尺の60尺になり、小金堂と塔の中央間は約10.80m、大尺の30尺になり、中央間の2倍が心芯間の距離になっている。

（4）弥勒堂（金堂か？）

小金堂の心芯から北へ約59.04m、大尺の164尺の位置に弥勒堂の心芯があり、小金堂の北辺と弥勒堂の南辺との距離も約45.18m、大尺の125.5尺になり、谷を隔てているとはいえ計画的に配置していることがわかる。

基壇は瓦積み基壇であるが、ここでは、瓦を約45度の角度に傾けて積み重ねる特異な積み方をしている。基壇寸法は桁行約22.86m、大尺の63.5尺、梁行約16.20m、大尺の45尺になる。建物は桁行3間、梁行1間の身舎に庇がまわるもので、身舎の部分に奥行きがないためやや窮屈な趣きである。柱間寸法は身舎が桁行各大尺の9.5尺、梁行が大尺の10尺、庇は身舎の各柱に対応し、桁行は中央間3間が各大尺の9.5尺、両脇の間が各大尺の7.5尺になる。梁行は中央間が大尺の10尺、両脇の間が各大尺の7.5尺になり、基壇の出は大尺の10尺になる。

基壇外に礎石列が散見されるが、柴田氏は後世に建物を拡張しているのではないかとの見解を示している。

5．南滋賀廃寺の造営計画

（1）伽藍配置

崇福寺と同じく昭和3・4年と13・14年に主要伽藍部分の調査が行われ、その後滋賀県教育委員会、大津市教育委員会の調査により主要伽藍の建物を補足する遺構や寺域を確定する遺構、寺院

に葺かれた瓦を焼いた瓦窯（榿ノ木原瓦窯）が検出されている。

伽藍配置は川原寺式伽藍配置であるが、塔と相対する小金堂が極めて正方形に近く、昭和15年の柴田氏の報告では疑問があるがとりあえず塔と仮定しており、中門を入って東西両塔が並ぶ薬師寺式伽藍配置を想定している。小金堂の南辺と塔の南辺は直線上に並び、両者とも南面する建物である。中門、南大門は確認されていない。伽藍の中軸線は磁北より東へ３度振る。真北からは３度40分西に振る。

（２）小金堂

瓦積み基壇の南面する建物で、基壇の梁行側は塔の一辺と同じ長さである。基壇の寸法は桁行約13.31ｍ、梁行約12.07ｍで大尺で桁行37.5尺、梁行34尺になる。（大尺の１尺は35.5㎝以下同じ）

礎石は後世の開墾により消失している。

（３）塔

瓦積み基壇の建物で、基壇の寸法は一辺約12.07ｍで大尺で34尺になる。

礎石は小金堂と同じく消失している。心礎は金堂の西方に発見せられたものが、この塔の心礎であるとみなされているが定かでない。

小金堂と塔の心芯間の距離は約23.69ｍ、大尺で66.75尺になる。小金堂と塔の中央間の距離は約11.00ｍ、大尺で31尺になる。

（４）金　堂

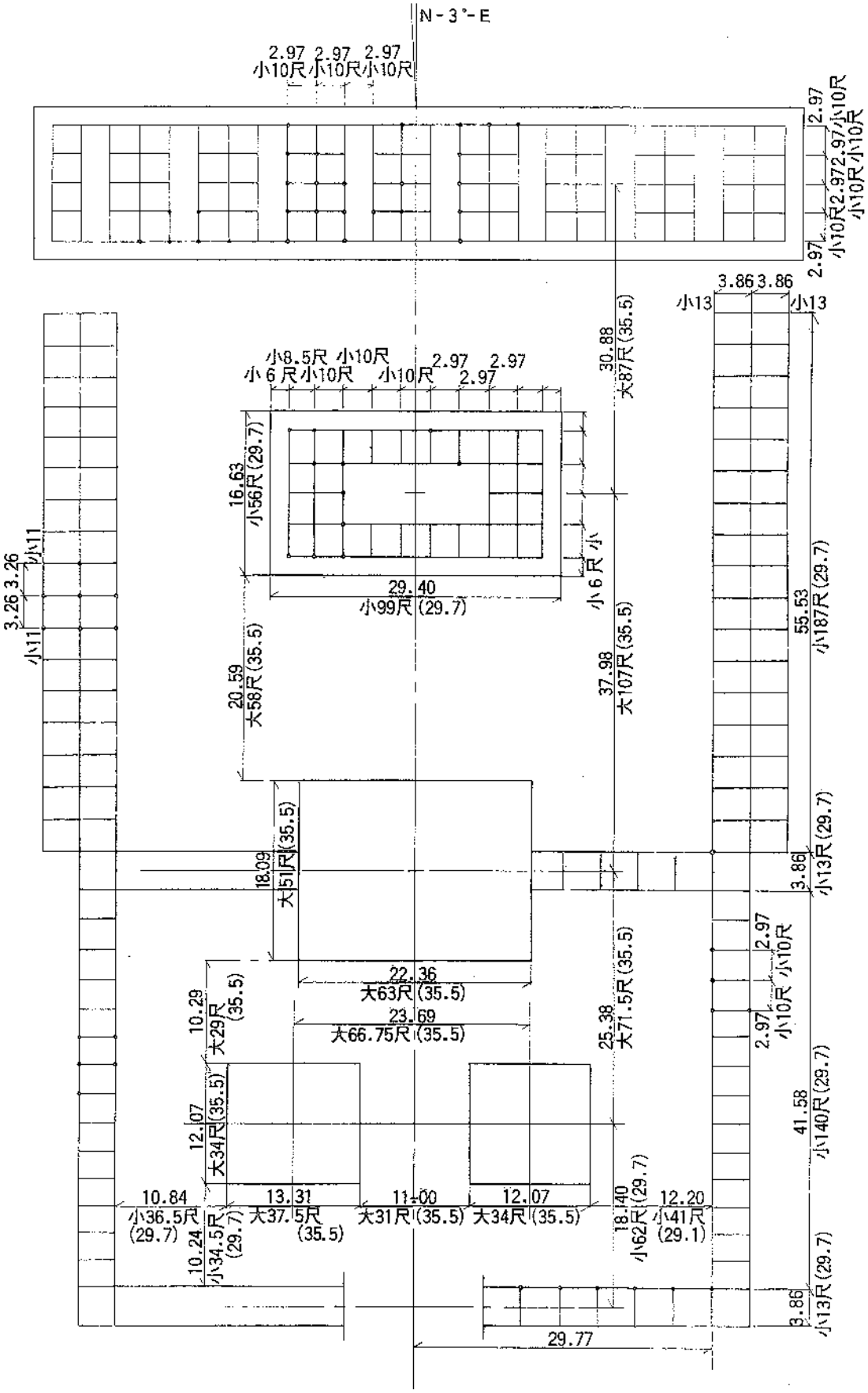
瓦積み基壇の建物で調査トレンチ内で礎石が１石だけ検出されたが、元の位置にあったものではないと報告されている。その後の大津市教育委員会の水道管、ガス管移設のための調査でも基壇内では確認されていない。基壇は二重基壇で一段目の地覆石の上に瓦を数枚積み重ねた後、30㎝ほど中にずらして地覆石を並べさらに瓦を積み重ねていくものである。穴太廃寺の金堂の瓦積み基壇は、地覆石の上面いっぱいを使って瓦を積み重ねており、上から見ると瓦に隠れて地覆石が見えないように積まれているが、南滋賀廃寺のものは地覆石よりやや中にずらして瓦を積み重ねているため上から見ると地覆石の半分が見える状態である。

基壇の寸法は、桁行約22.36ｍ、 大尺で63尺、梁行約18.09ｍ、大尺で51尺になる。小金堂･塔の北辺と金堂の南辺の間の距離は約10.29ｍ、大尺で29尺になる。

（５）講　堂

基壇寸法は桁行29.40ｍ、小尺で99尺（小尺の１尺は29.7㎝で以下同じ）、梁行16.63ｍ、小尺で56尺である。礎石は身舎で５基、庇で６基検出されている。これによると身舎は中央間５間に両脇の間２間が付き桁行７間で、柱間寸法は、各小尺の10尺等間、梁行２間で各小尺の10尺等間になる。庇は桁行が両側小尺の8.5尺で、中央間は身舎の柱に各々対応し、各小尺の10尺等間、梁行は中央間が身舎と対応し各小尺の10尺等間になり、両脇の間は各小尺の10尺になる。基壇の出は小尺の６尺である。

金堂基壇北辺と講堂基壇南辺の距離は20.59ｍ、大尺の58尺、金堂心芯と講堂心芯の距離は



第5図　南滋賀廃寺伽藍配置図

37.98m、大尺の107尺になり、基壇の位置等の地割は大尺で計画し、建物は小尺で設計したものとみられる。なお金堂基壇北辺との間で用途不明の葛石列が検出されている。柴田氏の報告では金堂と講堂を繋ぐ施設とみなしているが東西に復元するとかなり幅の広いものになる。

（6）食　堂

講堂の心芯から30.88m、大尺の87尺の位置に食堂の心芯を計画して配している。調査では28基の礎石が検出されている。報告書では当初22基のみで、講堂北の部分に限られていたため基壇の規模を講堂と同程度とみなしていたが、その後西側で、大津市教育委員会の調査で6基確認され、桁行25間、梁行4間の連房式建物で、昭和13･14年の調査で検出された礎石間の壁地覆石列から別添図のような柱配列が復元された。各柱間は小尺の10尺で設計されている。

（7）回　廊

東西両回廊の一部が検出されている。幅は3.86m、小尺の13尺、柱間寸法は小尺の11尺である。金堂に取り付く回廊と中門に取り付く回廊は柱間寸法が小尺の13尺で復元されているが、とくに南回廊については、報告書の中で柴田氏は中門が未検出であるため断定できないと慎重論を述べている。また金堂に取り付く回廊の礎石は未検出で、固く叩き締めた面があるといった報告のみである。

（8）僧　房

東西両回廊の北側に桁行17間、約55.53m、小尺の187尺、梁行2間約7.72m、小尺の26尺の連房式の建物がのびる。柱間寸法は梁行が各小尺の13尺等間、桁行が各小尺の11尺等間である。

6．考　察

伽藍の造営計画の中で先の四箇寺をみるかぎり、数値的なものの共通点はあまり認められない。当初私見ではあるが、これらの寺院を建立した工人達が大津北郊に6世紀後半頃から集落を営んでいた渡来人であるならば、何らかの共通点があるのではないか、大津宮関連寺院ならば造営計画に何らかの官寺としての特徴があるのではないかというような素朴な疑問からこのような伽藍数値の見直しを試みた。

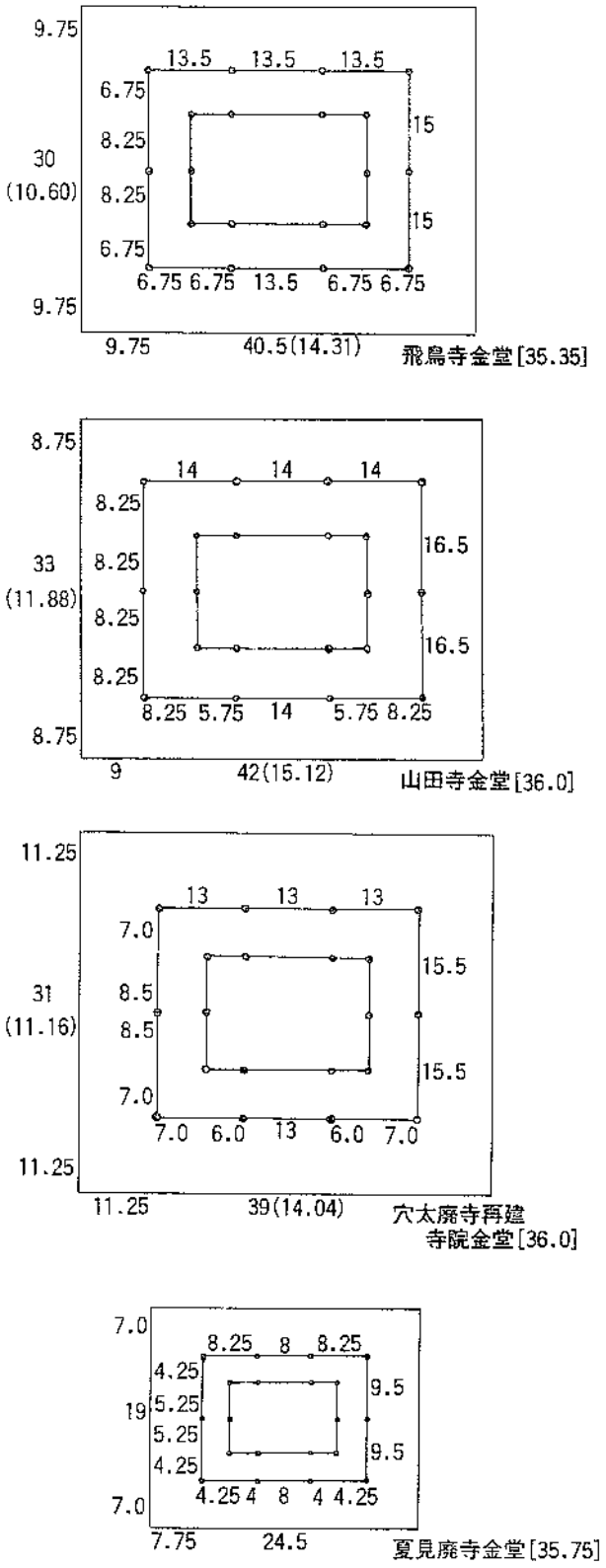
穴太廃寺創建寺院と崇福寺の共通点は①金堂･塔の規模が極めて近い②穴太廃寺創建寺院の金堂･塔の北側に崇福寺の弥勒堂を置くとうまく収まる。③堂塔の基準寸法が大尺の1尺が36.0cmである。④金堂･塔の中央間の二倍値を金堂･塔の心芯間の距離にあてている。

南滋賀廃寺と穴太廃寺再建寺院との共通点では、①金堂･塔が南面する。②金堂･塔の南辺が直線上に並ぶ。③金堂北辺と講堂南辺の距離が極めて近い。

穴太廃寺創建寺院、崇福寺、南滋賀廃寺において、中門を入って東西に小金堂、塔を配置し、中金堂を置く穴太廃寺創建寺院式と称してもいいような川原寺式に先行する伽藍配置をとる。

また、四箇寺に共通することは金堂･塔の中央間が極めて接近している。大尺の30から32尺の間におさまり、平坦面の少ない当該地の立地条件の制約に適するように造営計画されたものであろうか。

穴太廃寺創建寺院・再建寺院と南滋賀廃寺、崇福寺の造営は高麗尺と称されている大尺で1尺が35.5cmから36.0cmの物差しで計画されている。しかし、穴太廃寺再建寺院と南滋賀廃寺に限っては金堂・塔はこの大尺を用いて設計されているのに対して、講堂以下付属建物については、天平尺と称されている小尺で1尺が29.7cmの物差しを用いて設計している。古代建築の研究家では高麗尺の使用は天智朝までと考えており、もしそうであれば、天智朝において金堂・塔の完成はみたものの講堂以下の建物の完成は天武朝以降に持ち越されていることになる。両寺院とも主要建物の地割は大尺で行われているが、基壇の寸法や構造物は小尺で設計されていることや、南滋賀廃寺では回廊・僧坊が小尺で造られているため金堂の取り付き部分で寸法が均等にならない状況や、小金堂・塔との間隔が小尺でも割れず近似値にしかならない等の現象が起きている。穴太廃寺においても同様で、鐘楼や経蔵、付属の蔵等の配置は小尺で設計しており、寺院の完成までにはかなりの年数を得たのではないだろうか。しかし、一方ではこの考え方に批判的な見解もあり、穴太廃寺再建寺院の講堂の下には金堂・塔と同じ時期に完成した講堂があるはずだとか、壬申の乱で壊れたので建てかえたとか、南滋賀廃寺にしても創建当初のままではなく、改築があったとみる意見もある。また、四寺院とも伽藍の中軸線方位はばらばらである。崇福寺では隣どうしの小金堂と塔の方位が異なるほか、穴太廃寺再建寺院では金堂・塔の中軸線方位と講堂の中軸線方位が異なるなど不可思議なことになっている。



第6図　山田寺型金堂比較図

地軸のずれによるものか、あるいは、地震による地形の歪みか、現段階では不明事項である。

穴太廃寺創建寺院を川原寺式と仮定すると穴太廃寺再建寺院のみが法隆寺逆式(法起寺式)になるわけであるが、岡田英男氏が法隆寺西院伽藍の着手が天智9年(670)の火災後、天武年間に降るとすれば、穴太廃寺再建寺院は法隆寺系伽藍配置の最古の例となるとのべておられる。金堂は前述の通り山田寺金堂と同じ特異な柱配置で、山田寺と同じく大尺の1尺が36.0cmを基準寸法として設計されている。基壇寸法が、飛鳥寺、山田寺に比べると正方形に近いこと、梁行方向の寸法がやや大きいこと等の違いはあるが、上屋構造物に関してはほとんど差がないこと、身舎の規模もほとんど差がない等の類似点もある。規模や各柱間寸法をみるかぎりでは、飛鳥寺に近く、山田寺と飛鳥寺の中間値をとる規模である。また、夏見廃寺金堂は穴太廃寺金堂を約60%に縮尺した大きさである。穴太廃寺再建寺院金堂は大津宮遷都以前の造営計画物とみる。

伽藍配置のパターンを整理すると、①一塔一金堂の塔・金堂直列型、②一塔二金堂で小金堂・塔並立相対型、③一塔二金堂で小金堂・塔並立南面型、④一塔一金堂並立南面型になる。①か②が穴太廃寺創建寺院、②は崇福寺、③は南滋賀廃寺、④は穴太廃寺再建寺院になる。このうち南滋賀廃寺は川原寺式であるが塔と相対する小金堂は南面する違いがある。先に岡田氏が指摘した法隆寺式伽藍配置の出現期において最近の動向では、再建法隆寺より古い7世紀半ばにさかのぼることが述べられている。一つは「法起寺塔露盤銘文」によって舒明10年(638)に金堂が営まれたとする法起寺が発掘調査により現在の三重の塔に先行する堂塔があったことが確認されていること、同じく斑鳩の里三寺院にあげられる法輪寺が発掘調査により塔の基壇堀込み地業の築土から出土した瓦より650年代に金堂で葺かれていたものという見解がだされており、法隆寺式伽藍配置の初現は650年代までさかのぼることが判明している。山田寺に関しては天武5年(676)に塔が完成したとあり、このような事例からみると伽藍配置の形式で後先を論ずるのは無理がある。ただし、塔・金堂が直線上に前後に並ぶ形式から横に並ぶ形式に変化する時期において、もし、穴太廃寺創建寺院が②の場合最も古い例となり、7世紀中頃に寺院の伽藍配置においての変革期があったことは確実であろう。

穴太廃寺再建寺院、南滋賀廃寺、崇福寺、園城寺前身寺院の4箇寺は大津宮に関連する寺として、また宮を防御する施設として林博通氏はとらえており、遷都の時点ではすでに4箇寺とも堂塔が揃っていたと考えている。しかし、造営計画の数値を見るかぎりでは現在進行中で大津宮遷都の最中もトンカンやっていたとしか思えてならないが如何なものであろう。今回、穴太廃寺創建寺院は現状遺構で残っている南滋賀廃寺よりは以前に建立されたものであるという仮定のもとで考察した。そこで、穴太廃寺創建寺院が大津宮遷都以前に伽藍が整備された状態ですでにあり、大津宮遷都を計画する段階で南滋賀廃寺、穴太廃寺再建寺院の造営もしくは改築計画が持ち上がったのではないかという仮説を提出しておく。また、私の不勉強はもとより能力不足で伽藍の全体計画の地割りを見出すことができなかった。こうではないかというような見解があれば御教示願いたい。本稿では紙面の都合により使用されていた瓦について一切言及しなかったが、次回には瓦にもスポットをあてて、これまでに論じられてきた意見や見解に疑問点を投げかけて見た

い。特に、南滋賀廃寺出土の通称「サソリ文軒瓦」といわれる方形の軒瓦とセットになる単弁の軒丸瓦や方形の平瓦等の年代がネックになると考えられ、穴太廃寺出土の瓦とあわせて検討してみたい。

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしえの渡りびと－近江の渡来文化－』や、それと関連したシンポジュームを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。　平成８年３月

平成８年３月

紀　要　第９号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本　富士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668